



# 教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,  
Città del Vaticano の転載許可済  
©1990  
発行所  
財団法人 精道教育促進協会  
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-8  
☎(0797)31-3452

《若者たちへ》

## 弱さを口実にしてはならない

**1** 皆さんは、物事のあるべき姿と現実の姿、教会の教えとキリスト信者の現実の生活、福音の良し知らせと人生の厳しい現実との間にしばしば存在するズレについて悩んでいます。また、多くの離婚や家庭問題に直面して、婚姻に関する教会の教えをどのように受入れるべきかと尋ねます。さらに、消費文化と快楽主義に取りまかれています。私たちが、独身生活を含めて司祭職や修道生活に召されていることを感じることができるとは、どうでしょうか。一言で言えば、どうすれば、私たちに現代文化の支配的な傾向に反する理想を呼びかける教会に忠実であることができるかと問いかけています。

これらの質問に答えるため、まず第一に、より根本的なことが問われなくてはなりません。すなわち私たちがイエズス・キリストとの関係とは何であるか、そしてキリストの弟子、キリスト信者であるとはどういうことであるのか、と。ヨハネの福音書に、イエズスと出會い、最初の弟子となった二人の感動的な話があります。二人とは、アンドレアとヨハネ自身でした。「二人の弟子がいついてくるのを見られたイエズスは、『何をしたいのか』と尋ねられた。(ヨハネ1・38) イエズスは皆さんにも同じ質問をなさっています。「皆さん、本当は、人生に何を求めているのですか」。これはイエズスが皆さんに、人生の意義と方向という基本的な問いを投げかけられる時のなさり方です。世界中の若者がそうであるように、皆さんも生きるに値する人生を望んでいます。皆さんは心の中で、善と正義に満ちた世界、人と人、国と国との間の、理解と調和に満ちた世界に對す

る強いあこがれを感じています。光と真実を基礎とした人間関係、つまり信頼と全き自由を持って生きたいと望んでいます。これら全てをどこに見出すことができるのでしょうか。イエズスはアンドレアとヨハネに、『見に来て』と言われた。二人はついていってイエズスの泊まっておられる所を見、その日はそこに泊まった。(ヨハネ1・39) イエズスのもとに行けば、心が最も望んでいることを期待できると知って留まったのです。イエズスが簡単な答えを与えられたからではありません。むしろ反対にアンドレアもヨハネも、主のためにたいへん苦しむことになりました。しかし、イエズスとの出会いによって、二人は自らの存在の鍵を握っていることに気づいたのです。イエズスの傍らに、人生のより深い意味を見つけたのでした。そうです、この若者は人生に最も高い価値を与える道を見つけたのでした。第二バティカン公會議は、このことを普遍的な表現を用いて次のように述べます。「キリストは人間を人間自身に完全に示し、人間の高貴な召命を明らかに」なさ

った。(現代世界憲章 22) 親愛なる若者の皆さん、キリストがお示しになったこの崇高な召命は、皆さんの召命でもあるのです。すなわち神の本性に与る者になること、新しい被造物となること、そしてあなたの中で働かれる聖霊の力によって罪を退け、神の似姿を取り戻すことです。キリストは皆さんの救い主であり、贖い主です。主のみ「道であり、真理であり、命である」。(ヨハネ14・6参照) しかし、キリストの救いの方法は、単に人間的な考えで想像できるようなものではありません。十字架に磔られ復活された主は、この世で、完全に安楽な生活ができるとは約束なさいません。この点について考えれば、地上の安楽や富や権力を十分享受している人々さえ、しばしば虚しさや不幸を感じていることに気づくでしょう。これらのものは、人間の心の深いあこがれに答えを与えることはできません。イエズスが約束なさったことは、主の十字架に倣い自分の生命を主と共に失うことを受入れるなら、すなわち、自分の命を父なる神に捧げ、未知の人や敵、さらに自分に罪を犯す人をも含めて隣人への愛に皆さんの人生を用いるなら、そして、全てのこと自分の意志ではなく神の御旨を求めらるなら、その時こそ、罪と死に對する主の勝利が皆さんの勝利ともなるということです。

これが地上において平和と正義と愛の神の国を打ち建て、いつの日か天国で主と永遠の幸福を共にすることができるよう新しい被造物になること、神の本性に与ること、神の似姿を取り戻すことの意味なのです。**4** キリスト者としてのこの完全な召し出しという見方に立つてのみ、結婚と家庭生活、司祭職と修道生活についての皆さんの質問に對する答えを見つけることができま

す。なぜならキリストは、キリスト信者の生活と行いの全てにおける模範であるからです。例えば人々に自分自身を完全に捧げられたキリストの姿を司祭や修道者が倣うように、独身生活は意図されています。それは、人々への奉仕に全てを捨てて献身させるために、夫婦の愛や家族の絆から解放します。独身生活は、いくばくかの人々に与えられる特別の恵みです。また叙階への召し出し、あるいは準秘跡的にキリストと一致せよという召し出しを受入れた人々に對する主の特別の愛の印です。このようにして、独身生活(独身性)は、来たるべき天国の前兆となります。そこでは「めとりもせず、嫁ぎもせず」(マテオ22・30)「神がすべてにおいてすべてとなるためである」(コリント①15・28)

結婚もキリストにおいてその完全な意義を見出すことができます。婚姻は、男女が愛ゆえに、自分自身を唯一その人に、決して破棄せぬ贈物として相手に与える秘跡です。世界に新しい生命を生み出す神の仕事に協力し、夫婦は忠実な愛によって最初の創造の仕事を経営するのです。(創世2・18参照) 全生涯にわたる二人の一致と交わりは、キリストが十字架上で「命を与えられたように」(エフェソ5・25)、キリストという

花婿が自分の花嫁である教会に示した完全な愛の証となるのです。

たぶん皆さんは、自らの崇高な召し出しに堅忍できなかった司祭や修道者、また、既婚者や家族を知っているのでしょうか。神だけが、人の心を裁くことができます。キリスト信者としての召し出しの義務から逃れるために、そのような人々の弱さや失敗を口実にはなりません。キリスト信者であることから生じる困難に打ち勝つ力をどこから得るのでしょうか。アンドレアとヨハネは、イエズスと共に「そこに泊まった」(ヨハネ1・39) イエズスとのつき合い、主との友情は、イエズスを神と認めた弟子の改心と忠誠の源となったのです。キリストは「生命の与え主」である聖霊を使徒の上に遣わ

# 聖母と共に 聖霊に心をひらく！



真のキリスト者として行動するためには、まず神の霊に満たされる必要があります。そのために、教会の母であり、皆さんの母である聖母マリアになお一層の注目を、お勧めします。(…)

聖母マリアほどみごとに、素朴な生活を聖化しながら生きた人がいるでしょうか。この地上で、聖母マリアほどみごとに、イエズスの喜びと苦しみと光栄の生涯を共にし、父なる神に対する子としての心と、隣人

され、彼らは「良い知らせ(福音)」を世界の果てまで伝える勇気で満たされました。聖霊の賜は私たちが主の要求に答えることができるよう、キリストに従う全ての人に与えられます。私たちが「完全になって神のすべてのみ旨を果す」(コロサイ4・12)ことができるように、神は恩寵を私たちの人間性を基礎にしてお立てになるのです。

5 キリスト信者としての生き方に関する考察を、今もう一歩進めなければなりません。皆さんの召し出しが何であろうと、道徳的な決定をする時に、何が正しくて何が間違っているかを、どのようにして知るのでしょうか。十字架にかけられ、復活されたキリストに従う者として、最初に考えなければならぬ

に対する兄弟愛の深みに達した人がいるでしょうか。今は御子イエズスの栄光に与る聖母マリアほど、私たちのためにより良いとりのなしのできる人がいるでしょうか。今から、聖母マリアに日常生活の伴侶となっていたかなければなりません。人生の全てを聖母マリアにお任せしましょう。そのために教会は、簡単に日常生活にたやすく取り入れられるロザリオの祈りを勧めています。私たちの救いの「鍵」である

ことは「自分は何を望むか」でなく、「この時、この状況において神は私に何を望んでおられるか」でなければなりません。神の御旨は、啓示と教会による啓示の正当な解釈と伝達によって知らされています。この法は全ての人の心に刻まれており(ローマ2・15参照)、その最高の表現はイエズスが弟子たちに要求され、聖霊が私たちの心に注ぎ込まれる神と隣人への完全な愛です。(同5・5)

聖霊は、教会が古くて新しい道徳問題に福音の教えをあてはめるよう助けながら、教会の中に現存しておられます。それゆえ教会の教えは、数多くの意見の中の一つでなく、キリストの権威をもって話す声です。従って、私たちの良心が善悪を決めるものではありません。(…)(90・5・13)

全ての出来事を思い出しながら、家庭で、共同体で、または個人で、落ちていてロザリオを唱え、玄義を黙想するならば、少しずつイエズス・キリストと御母マリアの心の中に入っていくことができるでしょう。「めでたし」を繰返しながら神の光と平安に満たされ、キリストの託身(受肉)とキリストの贖い、私たちが目指す目標(天国)を観想することでしょう。聖母マリアの助けを受け、聖霊に心を開き、全ての偉大な業を実現するために激励を受けることしましょう。そうすれば母親である皆さんも、生命をもたらす者、家庭を守る者、家庭での教育者としての役目を果せることでしょう。聖母マリアが皆さんの助けとなり慰めてでありますように。アーメン。

★ これからいくつかの重要な考察をしていきます。(…) 最初に、青少年に対してキリストの教えの伝達を遅らせたり、その内容を薄めたりすることはできないと言わねばなりません。真理の内容の伝達は、明瞭で活力あふれるものでなければならぬと同時に、個人的な生活の模範を通して証明されねばなりません。実際に具体的な状況に当てはめなければならぬし、また青少年が体験している全ての困難や必要に沿ったものでなければなりません。教会が信仰の遺産として持っているキリスト教の啓示の本質的な教えをなおざりにする計画や、

★ 次に、青少年のキリストとの出会いは、彼らが主と個人的に出会う機会を与えられることよって起りうるという事実を考慮するべきです。その出会いは真理の内容の体系的な把握と、至福の「論理」の理解においてなされます。この二つはまさに改心への旅であり、聖性への旅でもあり、共同体と全教会の使命への参加を要請するものであると言えます。だからこそ告解と聖体の秘跡に頻りに与る秘跡を中心とした生活の重要性を特に考慮しなければなりません。こうした秘跡に加え、豊かな泉であり一致の印である典礼的で個人的な祈りを発展させることも必要です。

★ しかしこれらの手段は、心に刻まれている自然法と神的美

## 疑いではなく 答えを！

定法の価値を知るため良心の道徳的形成に深い関心を払わなければ、その目的を達成することはできません。良心の形成は、生活の一致と責任ある行為の教育に、また青少年の人間として、キリスト信者としての成長に必要であり、決定的なものです。この教育面については、共同体でも教育機関においても、あらゆる分野における教育者としての役割は決して強調されすぎることはありません。今は、これまでになく、私たちが自由にする真理に精通しなければならぬし、それを理解可能で実践的な形で他の人に伝える方法を知らねばなりません。

★ 青少年のキリスト教的形成と、彼らが連帯を示し社会的な関わりを持つ必要性との間にある関係をよく説明することが、いかに難しいかはよく承知しています。私たちがこの国における正義の問題の緊急性と劇的な落差に気づいていることは言うまでもありません。もしも教育界の努力やキリスト信者の活動が、教会の社会教説の中に要求する実り豊かな原点を見つけないと、重大な事態と言わねばなりません。もしも、キリスト教が、青少年にとって社会的・政治的闘争に関わることや非難や反対運動に基く道徳主義に還元されるなら、それも重大な問題だと言わねばなりません。

(九〇・六・二三)

「召しだし」(再版)

ホセ・ルイス・ソリア著  
新田壮一郎訳 定価七〇〇円

# 説教・講話・書簡等の抄訳

## 神の呼びかけに

### 応えよう

「メキシコの若者が招待された5月8日、サン・ファン・デ・ロス・ラゴスの御ミサでのお説教」

「メキシコの多くの若者は「絶望の相続人」のように生きており、もうすでに「私たちが生きてこの世界の惨めで苦悩に満ちた面を、誰も変えることが出来ないと感じています」。

人々は逃避、怠慢、快楽主義、デイスコ、麻薬、無関心、悲観主義、人為的な楽園をもつエムマウスへの道を下って行きます。そこに多くの人は、避難所を求めているのです。キリスト信者の若者は、「希望の巡礼者」新しい福音宣教の「主役」となり、この国の社会悪への敵対者とならなければなりません。

#### 時代の主役

親愛なる皆さん、皆さんは歴史のこの決定的な時にあって、キリストにおいて正義と自由そして一致のある社会を築くため新しい福音宣教の主役となるよう召されています。

現代人は、何一つ実行されない内容のない言葉や演説に疲れ果てています。世間は、生活の模範の伴わない言葉を決して信じようとはしません。皆さんの生き方が、会う人々に

「なぜこの若者はあのように振舞うのだろうか。なぜそんなに幸福なのだろう。なぜあれ程自信と自由にあふれて振舞っているのだろうか」と疑問を抱かせる時、皆さんは真の証人となるのです。そのように生きているなら、人々はキリストが皆さんと共におられることを認めざるを得ないでしょう。皆さんはキリストを道、

真理、生命(ヨハネ14・6参照)として受入れることが、心の最も強い熱望を満たすという事実の証人となり、証明するでしょう。

親愛なる若い皆さん。皆さんは周囲の全ての人に福音を宣べ伝えるという緊急の任務に派遣されていることを知ってください。キリストは皆さんの弱さや限界をご存じです。しかし同時に、恐れることなく勇気を出すよう呼びかけておられます。私は世の終わりまで常におまえたたちとともにいる。(マテオ28・20)

親愛なる皆さん、さらにキリストは、生涯の最も聖なる厳粛な瞬間に最高の贈物を私たちに与えてくださいました。それはキリストの最後の望みであり、最も貴い宝物、マリア、御自分の御母でした。(「イエズスはその母と愛する弟子がそばに立っているのを見られ、母に『婦人よ、これがあなたの子だ』と言われ、また弟子には『これがあなたの母だ』

と言われた。)(ヨハネ19・26-27)これは、イエズスの(十字架からの遺言)です。

この命令によってイエズスは、若い愛する弟子ヨハネを代表として、全ての人間にマリアを母として与えられました。こうしてイエズスは、全て贖われた人々をマリアの息子・娘になさいませ。この時から世界中の誰もが、人生の苦難の時でも決して孤独になつたり見捨てられたりすることはなくなりました。若い皆さん、マリアは皆さんと共に歩んでおられます。マリアもまた御子と共に繰返しておられます。「恐れることはありません。私は世の終りまでい

## 罪は人間を疎外する

### 「罪」シリーズ ⑨

1 このカテケジスで罪について考察を進めると、創世の書第三章のあの最初の罪へと目が向けられます。聖パウロは最初のアダムの(不従順(ローマ5・19参照))と

言っていますが、これは(善悪の知識の木)についての創造主の掟に対する違反と直接つながっていました。その箇所を表面的に読み流せばあの禁令(木の実を食べてはいけない)は、たいしたことではないという印象を受けますが、もっと深く分析すれば禁令がたいしたことではなさそうに見えても、全く根本的な事柄を表していることが確信できるでし

つもあなたと共にいます。キリストは私たちに最高の贈物を与えてくださいました。それはナザレトのマリアの母としての世話と御保護を通して、イエズスが私たちの間に現存し続けてくださることです。

私の言葉を聞いてくださる皆さん、疑いや困難、悲しみに出会った時、処女マリアがあなたの慰めであり平和であることを知ってください。マリアはあなたに「はい」という返事を求めておられます。マリアはあなたに、キリストに徹底的に全てを捧げて生きることを求めておられるのです。そしてイエズスがあなたを、今生きている世界よりさ

よう。サタンの言葉をみれば明らかです。サタンは人間を説き伏せ、創造主の禁令とは反対の行動をさせるために、次のような理由をつけて誘惑します。「おまえたちがその実を食べれば、そのとき目がひらけ、善と悪を知る天人のようになる、神は知っているのだ。(創世3・5)

2 こうしてみると、知識の木の禁令の目的は、人間に、自分は(神のよう)でなく被造物にすぎないこと気づかせることにあると考えなければならぬようです。人間は(神の似姿)に創られているのですから

「聖なるロザリオ」ホセマリア・エスクリバー著 精道教育促進協会スタッフ訳 (改定新版) 定価一三三六円

らに良い世界を作るための道具とすることができるよう、神の手の中にあなたの全生活を委ね、恐れることなく従うようにと望まれます。もしキリストがあなたに全てを引き渡すことを求められるなら、その呼びかけに寛大に応えるようにとマリアは望んでおられます。神があなたを特別の聖なる使命に呼ばれても、恐れることはありません。キリストは人生の全てを、条件なしの決定的な奉仕を求めておられるのです。

テペヤクの私たちの母であるマリアが、皆さんとメキシコの全ての若者と共に生まれ、祝福してください。特別に完成された被造物です。しかしそうであっても、ただの被造物にすぎないのです。これが、人間という存在の根本的な真理でした。初めに人間が受け取った掟はこの真理を含んでおり、忠告の形で表されていました。皆さんは、神との親しい交わりに招かれた被造物であること、そして神御一人だけが皆さんを創り給うた御方であることを忘れないでください。分不相応のものになりた

いと思ってはなりません。(神のよう)になりたいた望みではありません。分相応に行動しなさい。そうすればするほど、快くなるでしょう。これは(神の似姿)という存在にまだすでに高められている状態にあるからです。この事が、皆さんを可視的世界の他の被造物と区別して、他の被造物の上に据えるゆえんなのです。けれども同時に、神の似姿という状態のゆえに分相応に行動しなけ

# 不変の教え

ればなりません。どうか創造主である神が、始めから被造物である皆さんと結ばれた契約に忠実であってください。

## 原初の法則

**3** この真理——人間の行状を統べる原初の法則——は、創世の書第三章のサタンの語りかけによって疑惑の対象となっただけではなく、論争的ともなりました。黙示録で呼ばれる「昔の蛇」(12・9)、誘惑の言葉を言うに当り、この法則を解釈する基準を初めてはっきりと述べました。そしてその後、この基準によって罪深い人間は、己れを肯定しようとか、神抜きを道徳を作ろうとか企て「転換」しているのです。というのは、この基準に従えば、神は人間を(疎外)する存在であるから、人間が人間らしくありたいのなら、神を捨てねばならないということになるからです。(例えばフォエルバッハ、マルクス、ニーチェ)

## 4

(疎外) という語は多様なニュアンスをもっています。しかしこの語はどの場合にも、他人のものである何かを(強奪)することを示すものです。まず最初に、創世の書第三章でサタンが、被造物・人間に属するものを創造主が(奪い取った)と言います。「神の似姿である存在」とは人間に属するものであって、神への依存をどんなわずかなことでも排除しようとはしません。この形而上学的な仮定からは、全ての宗教は現実の人間の状態とは両立しないとして、拒絶する態度が論理的に引き出されます。事実、無神論

## 5

誘惑と墮落についての聖書の物語から、この誤った理論——宗教史と心理学とのデータとは全く相反するもの——が、ある類推を提示していることに注目しましょう。創世の書第三章のサタン(昔の蛇)は神の存在に異議を唱えず、また創造の事実を直接否定することさえしていないのは、意味深なことです。これらの真理は、あの時には明白すぎて否定できなかったのです。その代り、この明白さにも拘わらず、サタンは——気ままに謀反を選んだ一被造物としての自分の経験から——人間の良心に(疎外)のイデオロギの核を構成するものを(幼芽)の形で植えつけようと、すでに「そもその始め」からすきを狙っていたのです。そのようにしながらサタンは、創造の真理の根本的な逆転を、その最も深奥の本質的な部分におい

て演じます。この世に惜しみなく存在をお与えになる神の座、創造主である神の座に、創世の書第三章のサタンの言葉は、創造に対する、特に人間に対する(横領者)であり(敵)である神を示すのです。実際には神の(似姿)に創られていたゆえに、人間が特別な天与の賜の受け手であることは明らかであったにも拘わらず真理は虚偽に追い出され、嘘にすり変えられてしまいます。歴史の「始め」にこの詐欺を行ったサタンのことを福音書は「嘘の父」と言っていますが、その「嘘の父」の手で真理は巧みに嘘にすり変えられたのです。「彼は始めから人殺しだった。彼は真理において固まっていなかった。彼の中には真理がないからである。」

# 単純で、深い祈り

## ——ロザリオ



十月の最後の日曜日の今日、ロザリオの信心に注目してほしいと思います。十月は、全教会でロザリオのために捧げられた月だからです。ロザリオは、私が特に好む祈りです。すばらしい祈りです。大層深い祈りであり、まことに単純な祈りです。この祈りでは、聖母マリアがお告げの天使とエリザベトから耳にした言葉を何度も繰返します。全教会が一緒にこの祈りに加わるのです。ロザリオは、教会とキリストの秘義における聖母マリアの神秘的で驚

彼はうそをつく時、心底からうそを言う。彼はうそつきで、うその父だからである。(ヨハネ6・44)

**6** 創造主の似姿として自由を与えられた被造物である人間の罪の根源として、歴史の始めに見出されるこの(嘘)の源泉を探し求めると、時々アウグスティヌスの次の言葉が心に浮んできます。(神を軽蔑するほどの自己愛)「神の国」(Mt. 28, Pl. 41, 438)原初の嘘は神を軽蔑するに至る憎しみにその源があります。これは倫理的拒絶の尺度として人間の最初の罪に反映しています。この尺度で計るなら、パウロがアダムの罪を「不従順」と述べて何を教えるようにしたかが一層深く理解できます。使徒は、あから

嘆すべき現存について述べている『教会憲章』の最終章を説明する祈りと言ってもよいでしょう。(めでたし)を繰返すと、キリストの生涯の主な場面が目前を横切ります。ロザリオは喜びと苦しみ、栄えの玄義から成り立っています。聖母マリアの御心を通してイエズス・キリストとの生き生きとした交わりに導くのです。同時に、個人の生活と家庭生活、国家と教会、人々の生活に関わる全ての出来事をロザリオの中に組入れて祈ることもできます。

さまに神を憎むとは言わず、むしろ創造主の意向への「不従順」、敵対とされています。これは人類史上ずっと、罪の主な特徴となって残るでしょう。この遺恨の重みに沈んで、人間の意志は弱くなり、悪に傾きやすくなって、永久に「嘘の父」の影響の下に身をさらしたままになるでしょう。歴史上の様々な時代を見れば気づくことですが、現代では、不可知論から無神論、さらには反有神論まで、様々な神否定がその証拠となります。それらは異なった方法で、宗教と倫理の(疎外する)性質についての概念が示されており、(嘘の父)が始めに示唆した通り、明らかにその根源は宗教にある、と言っています。(次号に続きます。)

自分と他の人、特に身近な人や親しい友の経験もこの祈りの中に加えることができます。こうして、単純なこのロザリオの祈りは日常生活に調和するのです。こしばらく、私は様々な国やいろいろな分野の代表者、教会やキリスト教団体の代表者に会う機会がありました。この人々との出会いをロザリオの祈りの言葉に表してきたと確言することができます。それは、全てに十全な意味を与えるこの祈りの中で、再び人々が出会うことができるためです。聖母も私も世界中の人々から、多くの心のこもった助けを受取りました。こうしてお礼を申し上げると共に、私の感謝を単純ながらもこの豊かなロザリオで表したいと思っています。皆さんも熱心に唱えてください。

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部八十円 送料実費  
■一年予約九〇〇円 送料六〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要

替振郵便 神戸 3-72393